山と博物館

第41巻　第5号　1996年5月25日　　大町山岳博物館

立山のライチョウ（オス）　　縣　宗一

「山鳴らし」

草薙　順子

その木の名前を知ったのは、雪模様の春浅い日だった。

「ほう……これは〈山鳴らし〉ですね」

Sさんは室内に生けてある枝に目を止めて言った。見たところ何の変哲もない枝。どころが私には大いに気になる木だった。

田んぼを隔てた隣りの山に、十数本群生していて、ひときわ目をひく。荒れるにまかせた松林の中、その一角だけは明かるく、すきとおった空気が満ちているようだ。葉の色や茂った様子は、スーラーの点描画を思わせる。幹は白樺の粉をふいた白さと違って、しっとりとした白さだ。全体像は細くしなやかで、すらっと背が高い。枝はポプラのように縦に伸びている。いつ眺めても木のまわりで風が遊んでいるのか、葉がちらちら揺れて見える。そこはかとなくポエムが漂っているのである。賢治童話の「土神と狐」が恋した〈樺の木〉のように、あこがれを抱かせる木だった。

室内の暖かさを春と間違え、冬眠から覚めたのだろうか、赤褐色の桑の実のような花芽が現れてきた。日増しにそれはふくらんで、毛虫が這うように長く伸び、七、八センチの不気味な尾となって、枝からぶら下がった。硬く閉じていた芽も殻をほどき、おずおずと開いていった。丸みを帯びた葉は萌木色から、爽やかな緑になった。葉裏はネルのような手触りで白かった。

「この木には秘密があるのですよ」Sさんは悪戯っぽく笑った。「葉が茂ったら、木の下に立ってごらんなさい」

それから、何度か雪が降り融けた。北斜面の雪の地図も次第に小さくなり、いつのまにか消えていた。山肌にへばりついて冬越してきた木々たちも、凛と枝を張り、迎える季節に生命を漲らせているのだろう、枝先にまで樹液が行きわたって艶やかだ。

芳しい緑こぼれる〈山鳴らし〉の木の下に立つ、五月は近い。木の秘密はいつかまた。

（麻績村在住）

近世における安曇の修験者

篠崎健一郎（しゅげんじゃ）

日本の原始信仰の中でも殊に強かった山岳信仰が、仏教のうちの密教と習合して成立した修験道という一派があり、修験者・山伏などとよばれるその派の宗教者たちが、諸国の霊山を遍歴しながら、その験力を高めるために修行をつんでいたことはよく知られる。中世以降になると、山伏たちは地域社会に定住する傾向をしだいに強め、大名に雇われて戦勝祈願をしたり、諜報活動に従う者もあり、村落に住み民衆の要望にこたえて除災招福の祈祷などをして、生活をする者が多くなった。江戸時代になると幕府は、積極的にかれらを地域社会に定住させるほか、本山派（天台宗系）当山派（真言宗）のいずれかに所属させ、組織下に置くとともに、宗門改めなどによって山伏たちの実態の把握につとめた。かれらの名や活動のありさまなどが、どうやら見えてくるのは近世文書の中であるが、ここではすっかり里山伏というものになった、近世の安曇の修験者たちのありさまをのべてみたい。

1．その分布

別表をごらんいただきたい。江戸時代のほぼ中間にあたる享保一〇年（一七二五）の時点における、大町組、松川組、池田組の三組の村名と、本山派・当山派・その他の山伏の名前を書き上げてある。

大町市・北安曇郡の修験者（享保一〇年）　◎印袈裟頭

組	村名	本山派	当山派	その他
大町組	宮本	清覚院	栄泉院	
	館之内			
	大町	◎高麗院・万教院・宝性院	◎永昌寺・常宝院・円福院・大重院・学仙・林勝院・摩長院	
	野口			戸隠山伏　鏡覚院
	借馬		徳宝院	羽黒山伏　行覚・長覚
	佐野			
	飯田	宝蔵院・藤本		
	蔵平		長法院	
	堀之内	吉祥院・大宝院		
	千国	快教院・光学南覚		
	青具	円宝院	泉秀院	
	高地	教宝院・左京		
	二重		長秀院・長国院・盛宝院	
	大塩		◎医王寺・玉宝院	
	左右		長光院	
	舟場		長覚院	
	漆沢峠	本明院		
	切明		福正院	
松川組	細野	大正院		
	大塚		大宝院・光福院	
	切久保		地宝院・和合院	
	板取	大行院	宝重院	
	清水	大性院	円勝院	
	下一本木			
	頃沼	国宝院		
池田組	池田	地福院		
	花見	法教院		
	北山		玉蔵院	
	中之郷	法澗院		

川組、池田組のうち、現在の大町市と北安曇郡に入る村々に住む、修験者―山伏たちの名鑑である。本山派二二名、当山派二六名、ほか三名が、本山派は大町の六日町の高麗院、当山派は美麻村大塩中村の医王寺と大町の永昌寺を袈裟頭（けさがしら）として名をつらねている。他に富士先達もいたはずだが、おそらく在家扱いなのだろうか、あげられていない。

これより前の資料や後代の資料と比較してみると、およその山伏はこの職を世襲しているようで、同じ院号を江戸時代を通して続けている家が多いが、反対にある時期門戸を張っていても、しばらくすると消えてしまう家もあり、栄枯盛衰のあること修験も商家などと同じである。また父親と同じ院号を倅も称さなければならない、というものでもなかったらしく、そこで前の名が消えることもあったようだ。

この院号というものは、修行成って一人前なればようやく名乗れるものだったようで、表中にもみえる学仙とか藤本とだけ書いてある者は、まだ弟子身分であるかと思われる。またこの院という称は、いわば店名のようなもので、その下に個人名がつく。例えば板取村の当山派宝重院は有快、大町の本山高麗院は寛道という人である。さらに文書の上にはあまり出て来ないが普通の寺院と同じように山号もあったようで、高麗院は仁科山、当山派の常法院は蓮盛山と称している。またただ医王寺とか永昌寺とだけ称するものもある。

表をみて感ずるのは、人家の集まっている大町に多くの山伏のいるのは別格として、在郷では平坦部より山間部に多いのはなぜだろう。これは推測になるが、当時山間部の村々の人口戸数が、平坦部に比べてむしろ多かった、というのが理由であるかもしれない。人の多い土地の方が、山伏の仕事も多いのが自然であろう。また江戸時代を通じて、時代の下るほどに山伏の数がふえていく現象もある。

町や村に普通一般の人びとと軒を並べて住む里山伏たちの家は、自らは寺と称しているが、通常いうところの寺とは認められておらず、また寺院風の建物を構えることも許されないので、外見は農家などと変わりがない。

天明行者肖像（堀金村　倉田家蔵）

光福院代々の墓地　八坂村　小菅

この道を志そうとする者は、しかるべき師匠に弟子入りして修行に励むのであろうが、ただ経典を読みならうばかりでなく、例えば大和の大峯山とか出羽三山とか戸隠山のような霊山に入って、荒行をつみ山霊の気をうけて、験力を身につけなければならない。しかし近世にはそうした山伏本来の、必須とされた修行はだんだん敬遠される傾向にあったようで、大本山から山入りを促す警告がしばしば発せられている。

2. 山伏の仕事

近世、寺院には寺領が与えられ、民衆は寺檀制度にがっちりと組みこまれており、寺院にとっては世俗的な意味で安泰至極な時代であった。寺院の位階ある僧侶たちは、たかだかと暮らしており、民衆の中にとぴこんでその宗教的欲求に応えるという、宗教的活動をする者は希であったといってよい。その間隙を埋めるような仕事を、里山伏たちはしていたわけである。かれらの仕事は日待・月待・荒神・庚申などの祭の導師、加持祈祷、調伏、憑きもの落し、まじないなどの呪術宗教的な分野が主だが、中には民間療法的な医療を行なったり、寺小屋を開いて村童たちに読み書きを教える者も少なくなく、村人の生活相談にのってやったり、とにかく村の知識階級として、少し気味悪がられながらも尊敬される存在だったのである。

かれらの活動が公文書などに記録されることはめったにないのだが、古文書の中に垣間みられるその姿を紹介してみよう。

まず近世直前の天正一三年（一五八五）、松川村川西の大和田明神の神主であった、松川道文という人がのこした祈願文である。（大和田泰文書）その年の正月一五日、かれは明神にさまざまな祈願のすじを述べたあと、

〃たう年中　御きせいとして、まい月まい日　ち志やういん頼申し―後略〃

法華経を読みたてまつる、とする。そのち志やういん（智証院？）とは、おそらく近辺に住む山伏で、さらには領主大和田氏に抱えられていた者であったかもしれない。それにしても神に祈願する心のあかしとして、法華経を読むというのは、神仏混淆の一現象としておもしろいし、そういう仕事も山伏にはあったとみえる。

つぎは氾濫を未然に防いだとされる戸隠山伏のことである。

寛永一五年（一六三八）大雨が降って、鹿島川の猫鼻付近で山崩れが起き、川をせき止めたためその上流に大きな池ができた。もしそこが決壊して水がいっぺんに流れ出すようなことになれば、下流の村々に大きな被害を及ぼしかねない。そこで見分役として出向いてきていた二人の藩役人は、すぐ下流の野口村に住む戸隠山伏鏡覚院に命じて、水難消滅の祈祷をさせた。そこで鏡覚院が日夜祈念につとめたところ、おおいにその効験があらわれて、水は人びとの願いどおりに少しずつ流れ出していき、溜った水はすっかりなくなった。鏡覚院はその功により、水野候から戸隠様の灯油田という名目で、高三石の土地を与えられた。

戸隠の奥社に祀られる九頭竜権現は、水の神であり、この地方の人たちは洪水のときにも旱魃のときにも、この神の加護を願うので、折よく近くにいた戸隠山伏がその任にあたったわけである。この事件で鏡覚院自身おおいに面目を施したばかりでなく、同業の山伏たちの株も上がったにちがいない。

つぎは文政三年（一八二〇）にあった野平新田村（現八坂村野平）の件である。

この村では庄屋の坂井七郎左衛門方をはじめ、あちこちの家で盗難があい次ぎ詮義をしたけれどもまったく犯人がわからない。このままではむらの締しもつかぬということで、困りはてた庄屋はじめ三八人の村人が連名して、村に住む山伏地宝院に、今後盗難が起こらぬよう祈祷を依頼した。これは村役だと思ってぜひ引受けてほしい。もし犯人がわかってもその名をおおやけにすることはしないし、貴院様に対していささかも恨みを抱くものでないことを誓う、という依頼状を書いたのである。

この切なる村人の依頼にこたえた地宝院が、精魂こめて祈祷したことは想像されるが、その結果はどうなったのかわからない。まあ何もかもうまく解決したということではないだろうか。こうした祈願も、村に住む山伏の職分であったわけである。

3. 有明山の信仰

この地方の修験者の活動を物語るについては、有明山の信仰を欠くわけにはいかない。

松川村の西に聳える有明山（二二四八メートル）は、北アルプスの主脈の山々からすれば前山であるが、その突兀たる巌岨なかたちや、全山が黒々とした樹木に覆われた山容や、里の天候の予兆を示すことなどから、水分の神の鎮まります霊山として、また山そのものを神として、古代から里人の崇敬をあつめていたと考えられる。例の八面大王の説話なども、そうした信仰の上に作られた話である。また

ただ屋内には荘厳された部屋があり、須弥壇があって不動明王とか蔵王権現などの像が安置され、しかるべき法具もある。朝夕の勤行もなされるのであろう。

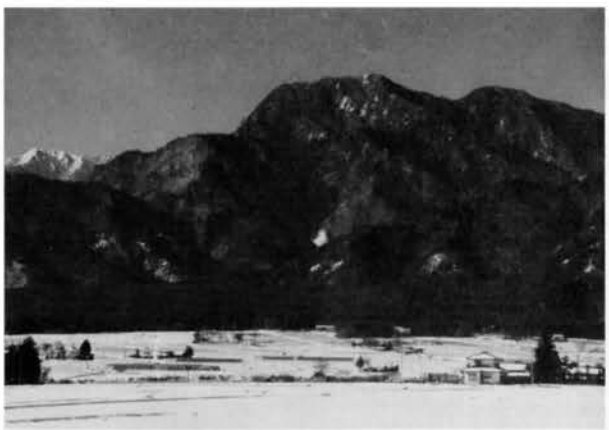
主人公の山伏は普通妻帯しており、妻もまた白衣の装束をつけ、巫子として夫の手助けをする事が多かったようである。その他に老人や子供がいたり、弟子が同居する家もあり、やや裕福かと見える家には下男や下女がいる。また宗教的な仕事がいつもあるというものでもないようで、かたわら百姓をしていたり、中には馬を飼っているものもある。なかなか大きな百姓をしている者がいるが、あるいは先祖代々山伏をして、田畑を買っていったのか、あるいは百姓が山伏になったのかどちらかであろう。

古くからこの山を遥拝したり、祭祀をおこなった松川村の鳥居奴のような場所も、あちこちにあったようである。そうした原始的な有明山信仰も、例にもれず修験道と習合することになる。その時代はおよそ鎌倉時代としておきたい。

有明山の登山口は、穂高町の宮城から入った黒川沢口と、松川村の馬羅尾口であるが、まずは宮城からの道が開かれたようである。

宮城という地名自体が、古代からここに山を祀る宮のあったことを想像させるが、鎌倉時代には、山中における修行を本旨とする真言宗の寺院高山寺が開かれ、この寺に依拠し有明山を行場とする修験者の一群が集まるようになった。その寺の後身が現在の正福寺で、鎌倉時代後期作の不動明王像を祀っている。

近世には寺も山伏たちの活動も衰微してしまったようであるが、幕末のころ有明山を再開山し、その信仰をふたたび燃え上がらせたのが天明行者である。



有明山　（松川村板取より）

天明行者（弘化三年～明治一三年）は、現在の堀金村扇町の生まれであるが、幼い時から宗教的な関心の強い、カリスマ性を具えた子であったといい、自然のように修験道に入っていったようである。羽黒山その他で修行をつんだのち、有明山信仰に入り、苦辛の末黒川沢口の登山道をひらき、かずかずの奇跡をあらわし、多くの人が帰依したという。

天明行者は宮城の地に有明山祭祀の里宮を設けたが、これが現在の有明山神社の前身であり、行者を教祖とする有明教の講が、各地にできていった。

芦間川の扇状地―神戸原の奥から有明山に登る道は、いわば裏参道であるが、ここがいつ開かれたのかは明かでない。

扇状地扇央にある鳥居奴の地は、この山の原始信仰をほうふつとさせる信仰遺跡であり、その北東に鎮座する有明山社（旧称有明山権現）ができたのは、江戸時代初期の寛永一四年（一六三七）で、その事情についての伝承がある。その説話にはやはり山伏らしい者の姿もちらつくのだが、鳥居奴や有明山社に山伏がかかわっていたのかどうかはわからない。

山伏というものは、その教義上信仰の山を開山する（初めて登山し登山道をつける）ことがたいへん名誉なことである。天明行者のばあいは再開山ということになろうが、それでもゆゆしいこととされる。

松川口開山の名誉は、享保六年（一七二一）七月八日におこなわれた、板取村の当山山伏宝重院宥快を先達とし、本山山伏大行院と徳重院、板取村庄屋尾曽藤右衛門、前庄屋高橋太兵衛はじめ村人たち総勢一七名の一行に与えられて然るべきであろう。これについては高橋太兵衛の「有明山略記」という手記も残されている。

略記には何も記されていないが、まだ誰も行ったことのないコースをあけようとするからには、先達はじめ参加者全員がときどきは集まって、山を眺めてコースになりそうなところの見当をつけたり、山のものを取りに行ったり、鉄砲射ちに入った人に尋ねたりして、研究をつんだ上で、天候を見すまして決行したものであろう。もちろん途中は難儀続きであったことを記してはいるが、およその方向は誤ることなく、ちゃんと山頂にたどりついている。おそらく現在の登山道とほぼ同じ道すじであったかと想像される。

当然信仰からする登拝であって、皆々の心のもちようも現代登山とちがう。

〝嶮岨をしのぎ漸々と御前ニ参りたれバ皆々目を見合て汗押ぬぐひ掌心ヲ合セ……〟

と高橋は書きのこしている。そして一行は頂上で感動あふるる〝通夜〟をするのである。

それからは時々有明山社の氏子たちが登ったとみえ、安永～天明の頃には奥宮も造営された。

その時から一〇五年ほどたった文政一〇年に、音界行者事件が起きた。権堂（長野市）の当山派山伏で柳原寺音界というものがやってきて、自分が有明山の開山者であるとか、さまざまな虚偽の話を申し立て、信者を集めて宗教活動を行った。有明山社神主の大和田市正の訴訟により、寺社奉行から音界は追放の刑、それに乗った信者の主な者も処罰されたという一件である。よくも悪くも山の信仰に山伏がからんだということである。

4．修験道その後

明治五年（一八七二）修験道は太政官布告によって廃止され、修験者たちは天台・真言の僧侶となったり、土地の神社の神職となったり帰農する者もあったが、人びとの要求がある限りは、それまでのような仕事がなくなってしまうものではなかった。たてまえはともかく、この地方の方言でホーゲンサマ（法験様？）と呼ばれた山伏たちが存命の限りは、続いていたのである。しかし後継者がないのも時代のおもむく所で、およそ太平洋戦争頃を境にして姿を消し、家の荘厳なども取り払われて、現在ではほとんど見られないのではないだろうか。しかし戦後になって修験教団そのものは復活独立した。大町市近くでは、八坂村藤尾の覚音寺が金峯山修験本宗の寺院となっている。

（日本考古学協会員）

博物館だより

人事異動

三月三十一日付で千葉彬司館長、福井まきよ主任が退職し、四月一日付で市役所会計課より堀田洋課長が館長に就任し、千葉悟志学芸員が新規採用されました。また、臨時職員として西山美保さんと降旗絹代さんが勤務しました。

山と博物館第41巻第5号
一九九六年五月二十五日発行
発行所　〒398長野県大町市　TEL㊀〇二二一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇五四〇―七―一三三九三